

専門学科高校の教育課程、教育成果、教師の資質能力

— 校長調査から —

南 本 長 穂

はじめに

今日、ほぼ高校全入時代に入り、さらに少子化の進行のもと高校の統廃合も進んでいる。その中で、生徒一人ひとりの個性や能力に対応した高校教育の個性化・多様化が重要な課題となってきた。この課題に対応すべく、高校教育改革がさまざまな面で進められてきている。例えば、入試制度や学区制の見直し、総合学科の設置、6年制中等教育学校の創設、単位制高校の設置などである。

教育内容面でも、10年ごとの学習指導要領の改訂はもちろんだが、科学教育の高度化、国際化や地域課題への対応など、これからの社会で生きる高校生に能力の伸長・開発を求めている。

しかし、近年の高校教育の改革が成功しているか否かといった教育成果に関する評価は未だ十分ではない。その最大の原因は、高校の教育成果をどのように評価するかが必ずしも明確になっていないからである。特に成果を測る指標が明確でない。もちろん、高校教育の改革という現実的な流れのなかで、評価のための指標を模索しても、大学進学と就職状況が教育成果の指標に限られてしまいがちである。そこで一歩進めて、高校教育の成果をより総合的、実証的に把握する作業が必要だと考えた。同時に、教育成果の成否を担う高校教師の資質能力の問題を個々の高校が抱える固有な課題と関連をはかりながら検討していく視点も必要だと考えた。すなわち、各高校の教育成果を生み出す教師の資質能力とは何かを明らかにすることである。

この問題設定から全日制の公立専門学科高校に焦点を当て、教育経営を担う校長等にアンケート調査を実施し、そのデータに基づき、次の3点を検討することにした。第1に、専門学科ではどのような教育がおこなわれているのかに関して、教育課程をみる。第2に、専門学科高校の教育成果をみる。第3に、高校教育の成果を生み出すことを期待される専門学科高校の教員に求められる資質能力をみる。

なお、専門学科は理数科や英語科等の普通科目の教育が主たる学科と工業、商業、農業等の専門科目が主たる学科に区分される。本調査では、後者の工業、商業、農業等の職業を主とした専門学科を取り上げた。調査は

2016年3月に1138校を調査対象に実施。7校は届かず返送、記入漏れ等の無効回答が8校。それで、1123校が対象高校で有効回答が567校（有効回答率は50.5%）。

1. 調査回答高校の概要

調査回答校（567校）を概観すると、次の通りである。

・学科構成は

1. 専門学科のみの設置	69.0% (391校)
2. 普通科との併置	28.0% (159校)
3. 総合学科との併置	1.9% (11校)
4. 普通科も総合学科も併置	0.7% (4校)
5. 無答	0.4% (2校)

・設置されている専門学科

(設置学科) (567校に占める比率)

1. 工業に関する学科	39.2% (222校)
2. 商業に関する学科	36.3% (206校)
3. 農業に関する学科	25.9% (147校)
4. 家庭に関する学科	12.7% (72校)
5. 福祉に関する学科	4.6% (26校)
6. 水産に関する学科	4.6% (26校)
7. 情報に関する学科	1.9% (11校)
8. 看護に関する学科	1.1% (6校)
9. その他	3.4% (19校)

回答形式は、複数学科、例えば工業科と商業科の両学科を設置する高校には1と2の両方にカウント。設置学科が多いのは工業科と商業科である。

2. 専門学科高校の教育課程

教育課程（カリキュラム）からみていく。平成21年3月9日公示の高等学校学習指導要領では、各教科・科目、総合的な学習の時間及び特別活動によって教育課程は編成されると、学校教育法施行規則（第83条、別表第3）で示されている。履修単位数は、各教科・科目の単位数並びに総合的な学習の時間の単位数を含め74単位以上。1単位時間が50分、35単位時間の授業を1単位として計算。そして、卒業までの履修単位数は、各学科に共通する各教科・科目、専門学科で開設する各教科・科目、総

合的な学習の時間によって構成されている。なお、専門学科で開設する専門教科・科目は「25単位を下らないこと」と定められている¹⁾。

本調査では、各学科に共通する各教科・科目を取り上げて、専門学科における教育課程をみる。

まず、教科の国語には、科目として国語総合、国語表現、現代文 A、現代文 B、古典 A、古典 B がある。必修科目は「国語総合」である。

表 1-1 の調査結果をみると、科目の構成で最も多いのが「国語総合、現代文 B」のパターンである。専門学科高校の 16.8% がこの構成の仕方である。なお、学科別に科目の構成の仕方は少し違いもみられる。

表 1-1 国語の履修

	工業科	商業科	農業科	専門学科の計
1. 国語総合、現代文 B	18.0	17.5	10.9	16.8
2. 国語総合、国語表現、現代文 B	10.8	19.9	16.3	14.3
3. 国語総合、国語表現、現代文 A	17.1	7.3	21.8	13.6
4. 国語総合、現代文 A	18.9	4.9	12.9	12.7
5. 国語総合、国語表現	15.3	5.3	9.5	9.7
6. 国語総合、国語表現、現代文 B、古典 A	1.4	7.3	4.8	4.6
7. 国語総合、国語表現、現代文 B、古典 B	1.4	7.3	2.0	3.7
8. 国語総合、現代文 B、古典 A	1.4	6.8	2.0	3.5
8. 国語総合	3.2	1.9	3.4	3.5
10. 国語総合、現代文 B、古典 B	0.5	4.4	0.0	3.2
	100.0% (222)	100.0% (206)	100.0% (147)	100.0% (567校)

注) 科目の構成の仕方は上位10位まで表示

次に教科の地理歴史には、科目として世界史 A、世界史 B、日本史 A、日本史 B、地理 A、地理 B がある。必修科目は「世界史 A」及び「世界史 B」のうちから 1 科目並びに「日本史 A」、「日本史 B」、「地理 A」及び「地理 B」のうちから 1 科目。

表 1-2 の調査結果をみると、科目の構成で最も多いのが「世界史 A、日本史 A、地理 A」である。専門学科高校の 35.9% がこの構成の仕方である。この構成の仕方は商業科、農業科とも最も多い。

教科の公民には、科目として現代社会、倫理、政治・経済がある。なお、必修科目は「現代社会」又は「倫理」・「政治・経済」。

表 1-3 の調査結果をみると、科目の構成で最も多いのが「現代社会」のみである。専門学科高校の 72.7% が

表 1-2 地理歴史の履修

	工業科	商業科	農業科	専門学科の計
1. 世界史 A、日本史 A、地理 A	32.4	40.3	50.3	35.9
2. 世界史 A、地理 A	43.7	16.0	27.9	31.1
3. 世界史 A、日本史 A	16.2	17.5	10.9	18.2
4. 世界史 A、世界史 B、日本史 A、日本史 B、地理 A、地理 B	2.3	3.4	3.4	2.1
5. 世界史 A、日本史 A、日本史 B、地理 A、地理 B	0.9	1.5	0.0	1.1
6. 世界史 A、日本史 B、地理 B	0.0	1.5	0.0	0.9
6. 世界史 A、世界史 B、日本史 A、日本史 B	0.5	1.5	1.4	0.9
	100.0% (222)	100.0% (206)	100.0% (147)	100.0% (567校)

注) 科目の構成の仕方は上位7位まで表示

表 1-3 公民の履修

	工業科	商業科	農業科	専門学科の計
1. 現代社会	77.9	62.1	74.8	72.7
2. 現代社会、政治・経済	16.7	25.7	19.0	19.0
3. 倫理、政治・経済	0.9	5.8	0.0	2.3
4. 現代社会、倫理、政治・経済	1.8	2.9	0.7	1.9
5. 現代社会、倫理	0.5	1.5	2.0	1.6
6. 政治・経済	0.5	0.5	0.7	0.5
	100.0% (222)	100.0% (206)	100.0% (147)	100.0% (567校)

注) 科目の構成の仕方は上位6位まで表示

この構成の仕方である。どの学科も「現代社会」が多い。

教科の数学には、科目として数学 I、数学 II、数学 III、数学 A、数学 B、数学活用がある。必修科目は「数学 I」。

表 1-4 の調査結果をみると、科目の構成で最も多いのが「数学 I、数学 II、数学 A」である。専門学科高校の 25.4% がこの構成の仕方である。この構成の仕方は商業科、農業科とも最も多い。

教科の理科には、科目として科学と人間生活、物理基礎、物理、化学基礎、化学、生物基礎、生物、地学基礎、地学、理科課題研究がある。必修科目は、科学と人間生活、物理基礎、化学基礎、生物基礎及び地学基礎のうちから 2 科目（うち 1 科目は科学と人間生活）。又は物理基礎、化学基礎、生物基礎及び地学基礎のうちから 3 科目。

表1-4 数学の履修

	工業科	商業科	農業科	専門学科の計
1. 数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学A	16.7	33.5	32.7	25.4
2. 数学Ⅰ、数学A	1.8	22.3	22.4	18.0
3. 数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学A、 数学B	23.0	10.7	12.9	14.6
4. 数学Ⅰ、数学Ⅱ	14.0	10.7	7.5	12.3
5. 数学Ⅰ、数学Ⅱ、 数学Ⅲ、数学A、数学B	16.2	2.9	4.1	8.6
6. 数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学Ⅲ、 数学A	7.7	1.5	2.7	3.4
7. 数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学B	7.7	1.9	0.0	3.2
8. 数学Ⅰ	0.5	2.4	1.4	2.6
	100.0% (222)	100.0% (206)	100.0% (147)	100.0% (567校)

注) 科目の構成の仕方は上位8位まで表示

表1-5の調査結果をみると、科目の構成で最も多いのが「科学と人間生活、化学基礎、生物基礎」である。専門学科高校の13.8%がこの構成の仕方である。工業、商業、農業の学科別にみると、科目の構成の仕方に違いがある。

教科の外国語には、科目としてコミュニケーション英語基礎、コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅱ、コミュニケーション英語Ⅲ、英語表現Ⅰ、英語表現Ⅱ、英語会話。なお、必修科目は、コミュニケーション英語Ⅰ。

表1-6の調査結果をみると、科目の構成で最も多いのが「コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅱ」である。専門学科高校の22.2%がこの構成の仕方である。工業、商業、農業のいずれの学科も同様の構成が最も多い。

次に、専門学科の教育課程に関して、次の2つの点を

表1-5 理科の履修

	工業科	商業科	農業科	専門学科の計
1. 科学と人間生活、化学基礎、生物基礎	1.4	18.4	21.8	13.8
2. 科学と人間生活、生物基礎	0.9	23.3	8.2	11.8
3. 科学と人間生活、物理基礎、化学基礎、生物基礎	11.3	10.2	19.0	10.9
4. 科学と人間生活、物理基礎、化学基礎	18.9	1.0	2.0	8.5
5. 科学と人間生活、物理基礎	16.2	1.5	0.0	6.7
6. 物理基礎、化学基礎、生物基礎	5.4	2.4	2.7	3.9
7. 化学基礎、生物基礎、地学基礎	0.0	3.4	3.4	3.2
8. 科学と人間生活、物理基礎、生物基礎	4.5	2.9	4.1	2.6
9. 科学と人間生活、物理基礎、物理、化学基礎、化学、生物基礎、生物	2.3	2.4	2.7	2.1
9. 科学と人間生活、物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎	3.2	3.4	2.7	2.1
	100.0% (222)	100.0% (206)	100.0% (147)	100.0% (567校)

注) 科目の構成の仕方は上位10位まで表示

表1-6 外国語の履修

	工業科	商業科	農業科	専門学科の計
1. コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅱ	24.3	19.9	21.1	22.2
2. 英語表現Ⅰ、コミュニケーションⅠ、コミュニケーションⅡ	18.0	10.7	12.9	13.9
3. 英語表現Ⅰ、英語会話、コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅱ	11.3	12.1	7.5	10.1
4. 英語会話、コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅱ	8.1	7.8	10.2	8.1
5. コミュニケーション英語基礎、コミュニケーション英語Ⅰ	5.0	1.5	10.2	4.8
6. 英語表現Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅰ	5.4	1.9	3.4	3.9
7. 英語会話、コミュニケーション英語Ⅰ	4.1	1.0	5.4	3.4
7. 英語表現Ⅰ、英語会話、コミュニケーション英語Ⅰ	3.6	1.0	6.1	3.4
9. 英語表現Ⅰ、英語表現Ⅱ、英語会話、コミュニケーション英語Ⅰ、 コミュニケーション英語Ⅱ、コミュニケーション英語Ⅲ	1.4	5.8	2.7	3.2
10. 英語表現Ⅰ、英語表現Ⅱ、コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅱ	1.4	2.9	1.4	2.6
	100.0% (222)	100.0% (206)	100.0% (147)	100.0% (567校)

注) 科目の構成の仕方は上位10位まで表示

みておく。1つは、専門学科における専門教科・科目の位置づけである。学習指導要領で、専門学科における専門教科・科目の履修に関して、すべての生徒に履修させる単位数は25単位を下らないこととされている。専門学科たらしめている専門教科・科目の25単位を下らないという履修の基準について、校長はどのように考えているのか。学習指導要領で示された単位数の基準について、単位数が少ないと考えるか。多いと考えるか。

調査結果をみると「1. 専門教育の充実のためには、25単位では少なすぎる」という考えを選択した回答は35.4%。逆に、「2. 生徒の卒業後の職業選択や大学進学の状態を考えると、25単位は少なくはない」という考えを選択した回答は15.9%。そして「3. 専門学科・教科を担当する教員数配置から考えると、現在の基準が妥当（相当）である」という考えを選択した回答は43.0%。

学科別にみると、工業科では「1. 少なすぎる」47.2%、「2. 少なくはない」12.8%、「3. 妥当である」37.6%。商業科では「1. 少なすぎる」31.4%、「2. 少なくはない」19.1%、「3. 妥当である」45.6%。農業科では「1. 少なすぎる」28.2%、「2. 少なくはない」15.5%、「3. 妥当である」51.4%。学科により差異がみられ、工業科では専門科目の単位数の基準では少なすぎるという回答傾向が強く、商業科と農業科ではその基準は妥当だと考える回答が多い。

2つは、専門学科の教育の特徴として職業に関する資格取得がある。普通科とは大きく異なる。この資格取得はどのようなねらいから進められているのか。調査結果をみると「資格を取得しておく、採用側の企業や会社からの評価が高く、就職の際に大いに役立つ」といった就職の際しての実際的な効用を資格取得の理由にあげる回答が15.9%。これに対して「就職の際に実際に役立つ効用よりも、専門学科での資格取得という目標設定が学習への意欲づけ、動機づけという点で効果が大きい」といった高校での学習への意欲づけとしての効用を理由とする回答が54.9%。また「資格の取得が生徒の自信（自己信頼感）につながり、学習や生活における積極性が高まる」といった学習や生活における自信の高まりという点での効用を理由とする回答が26.5%。

学科別にみると、工業科では「1. 就職の際の実用的効用」19.8%、「2. 高校での学習への意欲づけ」52.7%、「3. 学習や生活全般における自信の高まり」26.6%。商業科では「1. 就職の際の実用的効用」10.2%、「2. 高校での学習への意欲づけ」60.5%、「3. 学習や生活全般における自信の高まり」24.9%。農業科では「1. 就職の際の実用的効用」15.8%、「2. 高校での学習への意欲づけ」50.7%、「3. 学習や生活全般における自信の高まり」32.2%。学科別にみると、商業科での「2. 高校での学習への意欲づけ」への選択率が

高いという特徴がみられた。

なお、この資格取得と並んで、職業や学習への動機づけの効用や効果をねらいとして行われているのが、就業体験、ボランティア活動等の活動である。調査結果をみると、就業体験とかインターンシップを実施している専門学科高校は実に93.3%に達している。

3. 専門学科高校の教育成果を測る

1) 教育成果を測る指標

アメリカ合衆国における高校教育に関する研究では、高校教育の成果を測る指標として、ポーマン等によると、学力形成 (Academic Achievement)、キャリア開発 (Career Development)、大学への進学 (College Preparation)、情報処理能力 (Digital Literacy)、中途退学 (Dropouts) の5つの指標を指摘している²⁾。本研究ではこの指標に着目し、わが国の多様化、個性化が進む各高校の教育の成果を実証的に解明しようと考えた。わが国では、従来から高校教育の成果を測る指標は普通科での大学への進学と職業を中心とした専門学科での職業的なキャリア開発に限定されてきたという問題意識から、わが国の高校教育の成果に関する再検討が必要だと考えた。

なお、調査では、高校の教育成果を測定する指標として、ポーマン等の指標に準拠し、5つの指標を採用した。すなわち、1) 生徒の学力の向上、2) キャリア教育やキャリア開発、3) 大学等への進学、4) 生徒の学習能力や情報処理能力、5) 学習や生活の支援や指導。これら5つの指標に関して、各指標毎に8~9の具体的な内容を独自に作成し、調査項目を設定した。さらに、この5つの指標に加えて、わが国の高校教育の現状と特徴を考えて、6) 生活の送り方や生き方の指導、を教育成果の指標として加えた³⁾。以上の6つの指標からわが国における専門学科高校の教育成果を捉えることにした。

2) 高校の教育実践からみた教育成果

教育成果に関連すると考えられる実践を取り上げ、それにどう取り組み、どの程度の成果を上げているか。

まず、生徒の学力向上に関して、次の2つの実践への対応からみていく。

表2-11では「教育課程の編成を工夫し生徒の学力向上を図ること。例えば、学校設定科目を設けること、標準単位数よりも多い単位数の設定、夏休み等を利用しての授業時間数の増加等」に取り組み、成果を上げているかどうかについて尋ねた結果である。就職率を基準に区分し表示することにした⁴⁾。

結果をみると、就職率が下位の高校ほど、学力向上をめざし、授業の工夫改善等に取り組み、その成果が上

がっていると捉える。就職率別にみて有意差がみられる。就職率下位校では「十分な成果」と「まあまあの成果」を合わせると、その54.0%が成果が上がっていると回答。逆に、就職率上位校では「成果はまだまだ十分でない」と「成果はほとんど上がっていない、実践に取り組んでいない」を合わせると65.3%。ほぼ3校中2校の割合である。

2つ目の表2-12では、学力向上をめざす制度面の工夫について「普通教科・科目で習熟度別クラス（コース）を設けたり、少人数の授業を導入するなど、きめ細かい指導を行い、基礎学力を養い、生徒一人ひとりの学力を伸ばすこと」を実践し、成果を上げているかを尋ねた。統計的に有意差はみられず、高校間での差は大きくない。

第2に、キャリア教育やキャリア開発にかかわる成果をみる。

表2-21では「就業体験やインターンシップを実施し、職業を通して将来を設計する能力を育てたり、職業の役割や意義を理解させたり、職業観を形成するキャリア教育を実践できていること」を尋ねた。専門学科高校で

は、職業への対応という点で当然のことではあるが、キャリア教育やキャリア開発を重視していることがわかる。就職率別にみても有意差がみられるが、「十分な成果」と「まあまあの成果」を合わせると、就職率上位の高校で93.3%、中位の高校で89.2%、下位の高校で83.4%に達し、どの高校も高い数値である。なお、「十分な成果を上げている」という数値だけを取り上げると、就職率別にみてかなり大きな差がみられる。

また表2-22では「専門学科での学習の成果を生かし、スペシャリストの養成や地域産業を担う人材の養成という点で実績を上げること」を尋ねている。「十分な成果」と「まあまあの成果」を合わせると、就職率上位校で86.7%に達する。就職率中位校でも78.0%、就職率下位校で72.6%である。就職率別にみて統計上有意差はみられないが、就職率上位校ほど「十分な成果を上げている」への回答率が高く、成果を上げているという認識が強い。

第3に、大学等への進学にかかわる成果をみる。

表2-31では「大学等への進学に力を入れ、大学等への準備教育で優れた実績を上げること」を尋ねた。結果

表2-11 就職率別にみた「教育課程編成を工夫し学力向上を図ること。例えば、学校設定科目を設ける、科目の標準単位数よりも多い単位数の設定、夏休み等を利用した授業時間数の増加等」

	十分な成果を上げている	まあまあ上げている	まだまだ十分でない	上げていない 取り組んでいない	合計
就職率上位の高校	8.0	26.7	45.3	20.0	100.0 (150)
就職率中位の高校	9.2	37.6	43.6	9.6	100.0 (250)
就職率下位の高校	10.7	43.3	39.3	6.7	100.0 (150)
合計	9.3	36.2	42.9	11.6	100.0 (550)

$\chi^2=20.36$ $p < .01$ $df = 6$

表2-12 就職率別にみた「普通教科・科目で、習熟度別クラス（コース）を設け、少人数の授業を導入する等、きめ細かい指導を行い、基礎学力を養い、生徒一人ひとりの学力を伸ばすこと」

	十分な成果を上げている	まあまあ上げている	まだまだ十分でない	上げていない 取り組んでいない	合計
就職率上位の高校	20.0	54.0	19.3	6.7	100.0 (150)
就職率中位の高校	13.2	54.0	25.2	7.6	100.0 (250)
就職率下位の高校	20.7	48.7	23.3	7.3	100.0 (150)
合計	17.1	52.5	23.1	7.3	100.0 (550)

$\chi^2=6.19$ $df = 6$

表2-21 就職率別にみた「就業体験やインターンシップを実施し、職業を通して将来を設計する能力を育て、職業の役割や意義を理解させ、職業観を形成するキャリア教育を実践できていること」

	十分な成果を上げている	まあまあ上げている	まだまだ十分でない	上げていない 取り組んでいない	合計
就職率上位の高校	47.0	46.3	6.0	0.7	100.0 (150)
就職率中位の高校	35.2	54.0	9.6	1.2	100.0 (250)
就職率下位の高校	24.7	58.7	14.0	2.7	100.0 (149)
合計	35.5	53.2	9.8	1.5	100.0 (549)

$\chi^2=19.79$ $p < .01$ $df = 6$

表 2-22 就職率別にみた「専門学科での学習の成果を生かし、スペシャリストの養成や地域産業を担う人材の養成という点で実績を上げること」

	十分な成果を 上げている	まあまあ上げている	まだまだ十分でない	上げていない 取り組んでいない	合計
就職率上位の高校	30.0	56.7	12.0	1.3	100.0 (150)
就職率中位の高校	26.0	52.0	20.4	1.6	100.0 (250)
就職率下位の高校	19.3	53.3	24.7	2.7	100.0 (150)
合計	25.3	53.6	19.3	1.8	100.0 (550)

$\chi^2 = 11.26$ df = 6

表 2-31 就職率別にみた「大学等への進学に力を入れ、大学等への進学準備教育で優れた実績を上げること」

	十分な成果を 上げている	まあまあ上げている	まだまだ十分でない	上げていない 取り組んでいない	合計
就職率上位の高校	2.7	19.3	57.3	20.7	100.0 (150)
就職率中位の高校	2.8	28.8	54.4	14.0	100.0 (250)
就職率下位の高校	12.0	42.0	41.3	4.7	100.0 (150)
合計	5.3	29.8	51.6	13.3	100.0 (550)

$\chi^2 = 49.83$ p < .001 df = 6

表 2-32 就職率別にみた「大学との連携（高大連携事業）を実施し、大学見学会や研究室訪問、大学教員による授業や講演を行って、大学で学ぶことの意義を教え、興味を持たせること」

	十分な成果を 上げている	まあまあ上げている	まだまだ十分でない	上げていない 取り組んでいない	合計
就職率上位の高校	6.7	20.0	41.3	32.0	100.0 (150)
就職率中位の高校	10.4	34.8	40.8	14.0	100.0 (250)
就職率下位の高校	22.0	42.7	25.3	10.0	100.0 (150)
合計	12.5	32.9	36.7	17.8	100.0 (550)

$\chi^2 = 59.36$ p < .001 df = 6

は就職率別に有意差がみられる。当然の結果ではあるが、就職率上位の高校では成果を上げていると答える比率が低い。「十分な成果」と「まあまあの成果」を合わせると、就職率上位校で22.0%である。就職率中位校で31.6%、就職率下位校では54.0%と高くなる。

表 2-32では「大学との連携（高大連携事業）を実施し、大学見学会や研究室訪問、大学教員による授業や講演を行って、大学で学ぶことの意義を教え、興味を持たせること」を尋ねた。表 2-31と同様に、就職率が低い高校ほど「十分な成果」と「まあまあの成果」を合わせた数値が高い。就職率下位校では64.7%と高いが、就職率中位校で45.2%。就職率上位校で26.7%と、成果が上がっているという認識は就職率が高いほど低下している。

表2-31と表2-32の結果から、就職率下位校では、大学への進学準備教育において一定の成果を上げていると考える高校が過半数を超えるが、就職率中位や上位の高校では、大学等への進学準備教育への取り組みで成果を上げていると考える高校は多くない。

第 4 に、生徒の学習能力や情報処理能力にかかわる成

果をみる。

表 2-41では「教育環境を整え、授業等で生徒が情報機器を十分に活用でき、生徒の情報処理能力を高めること」を尋ねた。統計的には就職率別に有意差がみられない。「十分な成果」と「まあまあの成果」の合計は、就職率上位校で72.0%、就職率中位校で78.0%、就職率下位校が81.3%と少し高い程度である。情報処理能力を高める実践への取り組みで、就職率下位校で成果が上がっているという認識が少しみられる。

表 2-42では「教科・科目での知識習得だけでなく、読み、書き、話す等のコミュニケーション能力やプレゼン能力を高める教育・活動に力を入れていること」を尋ねた。就職率別に統計的に有意差がみられる。就職率下位校ほど生徒のコミュニケーション能力やプレゼン能力を高めようとする実践に取り組み、成果を上げていると捉えている。「十分な成果」と「まあまあの成果」の合計は、就職率下位校で74.7%、就職率中位校で69.6%であるのに対し、就職率上位校では62.7%と少し低い。表 2-41と表 2-42の結果は、就職率の下位校の方が生徒の学習能力や情報処理能力にかかわる成果を上げていると

表 2-41 就職率別にみた「教育環境を整え、授業等で生徒が情報機器を十分に活用でき、生徒の情報処理能力を高めること」

	十分な成果を 上げている	まあまあ上げている	まだまだ十分でない	上げていない 取り組んでいない	合計
就職率上位の高校	8.7	63.3	24.7	3.3	100.0 (150)
就職率中位の高校	15.6	62.4	20.8	1.2	100.0 (250)
就職率下位の高校	17.3	64.0	18.7	0.0	100.0 (150)
合計	14.2	63.1	21.3	1.5	100.0 (550)

$\chi^2 = 11.91$ df = 6

表 2-42 就職率別にみた「教科・科目の知識習得だけでなく、読み、書き、話す等のコミュニケーション能力やプレゼン能力を高める教育・活動に力を入れていること」

	十分な成果を 上げている	まあまあ上げている	まだまだ十分でない	上げていない 取り組んでいない	合計
就職率上位の高校	4.7	58.0	37.3	0.0	100.0 (150)
就職率中位の高校	11.6	58.0	29.6	0.8	100.0 (250)
就職率下位の高校	16.0	58.7	24.0	1.3	100.0 (150)
合計	10.9	58.2	30.2	0.7	100.0 (550)

$\chi^2 = 15.38$ p < .05 df = 6

表 2-51 就職率別にみた「中途退学者を出さないことを高校の経営目標や方針に掲げ、学習や生活の状況を細かく把握し、退学者を出さない方策（家庭訪問や個別的な学習や生活の指導等）を進めること」

	十分な成果を 上げている	まあまあ上げている	まだまだ十分でない	上げていない 取り組んでいない	合計
就職率上位の高校	13.3	61.3	22.7	2.7	100.0 (148)
就職率中位の高校	17.6	55.6	24.8	2.0	100.0 (250)
就職率下位の高校	19.6	59.5	16.9	4.1	100.0 (150)
合計	17.0	58.2	22.1	2.7	100.0 (548)

$\chi^2 = 6.51$ df = 6

表 2-52 就職率別にみた「生徒の生活態度が良く、いじめや暴力、盗難のない安全・安心の学校生活を送ることができる指導ができていないこと」

	十分な成果を 上げている	まあまあ上げている	まだまだ十分でない	上げていない 取り組んでいない	合計
就職率上位の高校	32.7	56.0	10.7	0.7	100.0 (150)
就職率中位の高校	35.3	54.6	9.2	0.8	100.0 (250)
就職率下位の高校	41.3	53.3	5.3	0.0	100.0 (150)
合計	36.2	54.6	8.6	0.5	100.0 (550)

$\chi^2 = 5.65$ df = 6

認識している。

第5に、学習や生活の支援や指導にかかわる成果をみる。

表 2-51では「中途退学者を出さないことを高校の経営目標や方針に掲げ、生徒の学習や生活の状況を細かく把握し、退学者を出さない各種の方策（家庭訪問や個別的な学習や生活の指導等）を進めること」を尋ねた。就職率別にみて高校間に差異はみられない。「十分な成果」と「まあまあの成果」の合計は、就職率上位校で74.6%、就職率中位校では73.2%。就職率下位校では78.6%。これはほとんどの高校において退学者を出さないといった

方策に一定程度取り組んでいることを示している。

表 2-52では「生徒の生活態度が良く、いじめや暴力、盗難のない安全・安心の学校生活を送ることができる指導ができていないこと」を尋ねた。「十分な成果」と「まあまあの成果」の合計は、就職率上位校では88.7%、就職率中位校では90.0%、就職率下位校では94.6%であり、就職率別にみて高校間に有意差はなく、ほとんどの高校で、いじめや暴力のない、安心安全の学校生活を送る指導ができていないと考えている。

第6に、生活の送り方や生き方の指導にかかわる成果をみる。

表2-61では「高校での学習や生活を通して、将来の生き方を考える機会（活動や行事）が多く、しっかりとした生き方を選択できる能力を育てる指導ができていないこと」を尋ねた。就職率別にみて高校間に差異はみられない。「十分な成果」と「まあまああの上」の合計は、就職率上位校で85.3%、就職率中位校では88.0%。就職率下位校では88.0%。ほとんどの高校において安心・安全の生活を送ることができるような秩序ある生活をつくり出すといった方策に取り組み、成果を上げていると認識している。

表2-62では「生徒の生活態度が良く、校則もよく守られている」といった基本的な生活習慣を重視する指導ができていないこと」を尋ねた。就職率別にみて高校間に差異はみられない。「十分な成果」と「まあまああの上」の合計は、就職率上位校で88.0%、就職率中位校では88.4%。就職率下位校では94.0%。表2-61の結果と同様に、ほとんどの高校において基本的な生活習慣を重視する指導ができており、成果も上がっていると認識している。

3) 教育成果に関連した取り組み

次に、専門学科の6つの教育成果に関して、それぞれの教育成果ごとに、高校の取り組みとして成果の上になっているものに順位を付け、1位と2位の取り組みを尋ねた。同時に、取り組みはしているが、成果がまだまだみえないものも尋ねた。以下、表3-1から表3-6で示す。

表3-1は、生徒の学力の向上に関して、どのような

取り組みをしているか。9つの取り組みを設定し、順位を付けて回答を求めた。表示は1位選択の選択率が高い順に行った。1位選択で最も選択率が高いのは「1. 習熟度別学級編成を行い、生徒の学力や成績に対応した指導」という取り組みである。この取り組みを就職率別にみると少し差異がみられる。例えば、就職率上位校では1位選択で32.0%、2位選択まで含めると46.0%。他方、就職率下位校では1位選択で27.2%、2位選択まで含めると37.1%。学力の向上に習熟度別編成が効果的と捉える考えに少し差異があるが、学力向上策としてはその有効性を認める選択率の高さである。次いで選択率が高いのは「2. 個別指導の充実（個別指導時間の設定等）や補習授業の導入」であり、1位選択と2位選択の合計では就職率別にみて上位校、中位校、下位校ともに、選択率が最も高く48%台である。

なお、就職率別にみて、上位校で成果が上がっている取り組みとしては「3. 学力が平均（校内での学年平均）よりも低い生徒への指導の工夫」の選択率が高い。他方、下位校で成果が上がっている取り組みとしては「4. 新しい授業方法（個別指導や協同学習の導入等）に関する研究」と「5. 夏休み等の休暇や土曜日（休日）の授業（補習授業や個別指導等）の実施」で選択率が高い。

以上の選択傾向から、就職率上位校では、習熟度別編成での授業や個別指導の充実や補習授業の導入、学力の低い生徒への指導の工夫などを、就職率下位校では、習熟度別編成での授業や個別指導の充実や補習授業の導入に加えて、新しい授業方法としての協同学習の導入等の取り組みでの成果を認識している。

表2-61 就職率別にみた「高校での学習や生活を通して、将来の生き方を考える機会（活動や行事）が多く、しっかりとした生き方を選択できる能力を育てる指導ができていないこと」

	十分な成果を 上げている	まあまあ上げている	まだまだ十分でない	上げていない 取り組んでいない	合計
就職率上位の高校	17.3	68.0	14.0	0.7	100.0 (150)
就職率中位の高校	17.6	70.4	11.6	0.4	100.0 (250)
就職率下位の高校	22.0	66.0	12.0	0.0	100.0 (150)
合計	18.7	68.5	12.4	0.4	100.0 (550)

$\chi^2=2.8$ df=6

表2-62 就職率別にみた「生徒の生活態度が良く、校則もよく守られている、といった基本的な生活習慣を重視する指導ができていないこと」

	十分な成果を 上げている	まあまあ上げている	まだまだ十分でない	上げていない 取り組んでいない	合計
就職率上位の高校	38.7	49.3	11.3	0.7	100.0 (150)
就職率中位の高校	36.0	52.4	10.8	0.8	100.0 (250)
就職率下位の高校	46.7	47.3	6.0	0.0	100.0 (150)
合計	39.6	50.2	9.6	0.5	100.0 (550)

$\chi^2=7.3$ df=6

逆に「まだまだ成果がみえない取り組み」をみると、「4. 新しい授業方法（個別指導や協同学習の導入等）に関する研究」「6. 教師間での教材内容の研究（校内研修）の活発化・充実化」「7. 学力向上に向けての教員間の意思疎通と学力向上策の検討」などの比率はどの高校でも高い。特に「4. 新しい授業方法（個別指導や協同学習の導入等）に関する研究」への取り組みが不十分だとする比率は、上位校の27.3%をはじめ、中位校の22.8%、下位校の22.5%と、選択率は最も高い。どの高校でも課題とされる取り組みとなっている。

表3-2は、キャリア教育やキャリア開発に関して、どのような取り組みをしているか。8つの取り組みを設定し、順位を付けて回答を求めた。表示の仕方は、表3-1と同様に1位選択の選択率の高い順である。

就職率上位校と中位校でともに選択率が高いのは「1. インターンシップや就業体験の機会を設けて、就業の体験活動を行うこと」及び「2. 職業にかかわる各種の資格取得を、生徒に奨励し、資格取得生徒の人数を増やすこと」である。他方、就職率下位校では「1. インターンシップや就業体験の機会を設けて、就業の体験活動を行うこと」の選択率は高いが、上位校、中位校に比べると数値は少し下がる。1位選択と2位選択の合計の数値で、続いて選択率の高いのは「4. 卒業生や著名な職業人を招き仕事への取り組み方を話してもらう機会を設けること」及び「3. 将来の進路を考える機会を増

やし、進路実現に向けて意欲的な態度を育てていく」。この2つの取り組みを、上位校と中位校と比べると、下位校の数値が成果が上がっていると捉えることができる。

逆に「まだまだ成果がみえない取り組み」をみると、就職率上位校と中位校では「3. 将来の進路を考える機会を増やし、進路実現に向けて意欲的な態度を育てていく」の選択率が上位校が20.0%、中位校が19.7%と高い。他方、下位校では「5. ホームルーム活動の時間等を活用して、自分の今後の生き方・働き方を考えさせる」の選択率が18.5%と高い。

表3-3は、大学等への進学に関して、どのような取り組みをしているか。8つの取り組みを設定し、順位を付けて回答を求めた。表示の仕方は表3-1と同様。

1位選択で最も選択率が高いのは「1. 専門学科で学んだことを活かし、推薦入試・AO入試等での合格者を増加させること」である。就職率別にみて、上位校で69.3%、中位校で70.0%、下位校で73.5%と取り組みの成果が高く評価されている。続いて高いのは「2. 大学で学ぶことの意義や知的な探究の楽しさ・喜びを教えること」である。だが、1位選択の数値は高くなく、最も高い選択率の中位校で10.0%に過ぎない。

逆に「まだまだ成果がみえない取り組み」をみると、「2. 大学で学ぶことの意義や知的な探究の楽しさ・喜びを教えること」の取り組みと「3. 大学に進学するこ

表3-1 生徒の学力の向上に関して

	就職率上位の高校			就職率中位の高校			就職率下位の高校		
	1位	1+2位	無し	1位	1+2位	無し	1位	1+2位	無し
1. 習熟度別学級編成を行い、生徒の学力や成績に対応した指導	32.0	46.0	2.0	28.4	40.8	4.0	27.2	37.1	2.0
2. 個別指導の充実（個別指導時間の設定等）や補習授業の導入	22.0	48.0	4.0	26.4	48.8	4.8	26.5	48.4	4.0
3. 学力が平均（校内での学年平均）よりも低い生徒への指導の工夫	16.0	32.0	5.3	8.4	26.0	8.4	7.3	19.2	4.6
4. 新しい授業方法（個別指導や協同学習の導入等）に関する研究	4.7	12.0	27.3	10.0	17.6	22.8	10.6	21.2	22.5
5. 夏休み等の休業日や土曜日（休日）の授業（補習授業や個別指導等）の実施	7.3	14.0	3.3	7.2	15.2	4.8	8.6	26.5	6.6
6. 教師間での教材内容の研究（校内研修）の活発化・充実化	4.0	12.7	17.3	4.4	14.4	12.0	2.6	9.9	15.2
7. 学力向上に向けて教員間の意思疎通と学力向上策の検討	2.7	14.0	16.7	5.6	16.4	15.2	2.0	11.3	13.2
8. 学力が平均（校内での学年平均）よりも高い生徒への指導の工夫	2.7	2.7	6.7	4.0	6.8	11.2	3.3	7.9	8.6
9. テストの回数とか、復習・予習の課題を多くし、学力向上への意欲を高めること	3.3	9.3	15.3	2.0	6.8	12.8	5.3	8.6	17.2
10. その他	5.4	9.4	2.0	3.6	7.2	4.0	6.6	9.9	5.9

表3-2 キャリア教育やキャリア開発に関して

	就職率上位の高校			就職率中位の高校			就職率下位の高校		
	1位	1+2位	無し	1位	1+2位	無し	1位	1+2位	無し
1. インターンシップや就業体験の機会を設けて、就業の体験活動をおこなうこと	55.3	77.3	4.7	48.8	73.6	6.8	38.4	56.9	16.6
2. 職業にかかわる各種の資格取得を奨励し、資格取得生徒の人数を増やすこと	21.3	44.6	12.7	20.8	43.6	11.2	17.2	33.8	6.6
3. 将来の進路を考える機会を増やし、進路実現に向けて意欲的な態度を育てていく	10.7	25.4	20.0	8.4	22.8	19.7	17.2	31.1	14.6
4. 卒業生や著名な職業人を招き、仕事への取り組み方を話してもらう機会を設けること	6.0	26.0	10.7	11.6	30.8	8.0	14.6	35.8	8.6
5. ホームルーム活動の時間等を活用して、自分の今後の生き方・働き方を考えさせる	3.3	15.3	12.0	7.6	18.4	15.7	8.6	27.1	18.5
6. 個人にとっての職業の意味や役割等、職業を教え、職業観を育てる	1.3	6.0	12.7	0.8	4.4	15.3	1.3	5.3	11.9
7. 「まじめに働くことが大切である」といった勤労観を育てること	0.7	2.7	6.0	1.2	2.8	3.6	0	2.0	4.6
8. 「総合的な学習の時間」等で「道徳」に関する授業を行い、生き方・あり方を学ばせること	0.0	0.7	16.0	0.4	2.4	15.7	0	2.6	11.3
9. その他	1.3	1.7	5.3	0.4	1.2	4.0	2.7	5.3	7.3

表3-3 大学等への進学に関して

	就職率上位の高校			就職率中位の高校			就職率下位の高校		
	1位	1+2位	無し	1位	1+2位	無し	1位	1+2位	無し
1. 専門学科で学んだことを活かし、推薦入試・AO入試での合格者を増やすこと	69.3	78.0	6.7	70.0	78.4	9.2	73.5	84.1	9.9
2. 大学で学ぶことの意義や知的な探求の楽しさ・喜びを教えること	7.3	33.3	16.7	10.0	35.6	20.5	7.3	32.5	18.5
3. 大学進学に伴って広がる職業選択の機会や大学での学習の効用を教えること	6.7	30.7	20.7	5.6	37.6	17.7	4.6	31.8	15.2
4. 高大連携という考えのもと、就職よりも、大学進学者を増加させること	2.7	4.7	9.3	2.0	6.4	12.9	2.6	11.9	10.6
5. 授業の進度を進めるなどの工夫をし、入試への対策に力を入れること	0.7	10.7	8.0	0.8	8.8	11.2	3.3	9.9	9.3
6. 入試問題（出題傾向）の研究・対策を行い、日々の授業でそれを生かすこと	0.0	6.7	12.0	1.6	6.0	8.4	1.3	7.9	11.3
7. 予備校や塾の講師を招き、受験にかかわる学力向上の方法（授業のやり方）を学ぶこと	0.0	3.3	4.0	0.8	3.2	5.6	1.3	2.6	9.3
8. 入試問題（過去問）について教師間での検討会・研究会を活性化させること	0.7	2.7	8.7	0.4	1.6	8.0	0.0	0.7	8.6
9. その他	12.6	29.9	14.0	8.8	22.4	6.4	5.9	18.5	7.3

とで広がる職業選択の機会や大学での学習の効用を教えること」の取り組みが選択されている。前者が中位校（20.5%）と下位校（18.5%）で最も選択されており、後者が上位校で20.7%と最も選択されている。

表3-4は、生徒の学習能力や情報処理能力に関して、どのような取り組みをしているか。8つの取り組みを設定し、順位を付けて回答を求めた。表示は表3-1と同

様。

1位選択で全体で最も選択率が高いのは「1. パソコンの基本的なソフトであるワード、エクセル、パワーポイントなどを、授業等の学習や活動で積極的に活用できること」である。就職率の中位校（1位選択が36.8%、2位選択まで合わせる63.2%）と下位校（1位選択が33.8%、2位選択まで合わせる55.7%）で高い選択率が

みられる。他方、上位校で最も成果が上がっている取り組みは「3. 教科書で提示される基礎的・基本的な知識を確実に習得させること」で38.0%。2位までの選択率を合わせると52.0%に達している。就職率別に差異がみられた。

続いて、選択率が高いのは「2. 調べたこと・観察したこと、意見や感想等を、説明できるプレゼンの技能・能力を育てる」取り組みであり、就職率の上位校、中位校、下位校の間に大きな差はなく選択されている。

逆に「まだまだ成果がみえない取り組み」をみると、就職率上位校では「7. 国際化等に対応し、外国人講師を活用し、英語でのコミュニケーションの技術や能力を高めること」(20.7%)、続いて「6. 読解力や理解力、数的思考力や分析力等テスト・試験で求められる学力を伸ばすこと」及び「2. 調べたこと・観察したこと、意見や感想等を、説明できるプレゼンの技能・能力を育てる」が共に19.3%である。中位校では「6. 読解力や理解力、数的思考力や分析力等テスト・試験で求められる学力を伸ばすこと」(23.3%)、「7. 国際化等に対応し、外国人講師を活用し、英語でのコミュニケーションの技術や能力を高めること」(17.3%)である。下位校では「6. 読解力や理解力、数的思考力や分析力等テスト・試験で求められる学力を伸ばすこと」及び「8. デイバート法などを取り入れ、自分の考えを主張していく力を育てること」が共に16.6%である。以上の結果から上位校、中位校、下位校共に「6. …テスト・試験で求められる学力を伸ばすこと」を課題と位置づけていること

がわかる。

表3-5は、学習や生活の支援や指導に関して、どのような取り組みをしているか。9つの取り組みを設定し、順位を付けて回答を求めた。表示は表3-1と同様である。

1位選択で最も選択率が高いのは「1. 不登校ぎみの生徒に、個別懇談や家庭訪問など、きめ細かな支援をすること」である。これは就職率別にみて差異が少なく、どの高校でも1位選択及び2位選択までの合計、ともに最も選択されている。中位校では、1位選択で26.8%、2位までの選択で41.2%である。上位校の選択率も同様に高く、1位選択で26.0%、2位までの選択で40.0%である。下位校も、1位選択で25.2%、2位までの選択で38.4%と高い数値である。

続いて選択率の高い取り組みは「2. 校則を守れないとか、生活態度の良くない生徒への指導」であり、上位校、中位校、下位校とも、2位までの選択率が30%を超えている。さらに就職率別に特徴を探ると、上位校と中位校の選択率が高いのは「4. 生徒間の人間関係の深刻なもつれや軋轢、例えば、いじめ問題への対応や対策」と「3. 学習障害等、特別支援教育を必要とする生徒に手厚い支援教育をすること」である。他方、下位校の選択率が高いは「6. 授業等で消極的な態度をとる学習意欲の低い生徒への支援」及び「5. 授業の進度に遅れ気味で、学力の点で問題が多い生徒への支援や指導」である。

逆に「まだまだ成果がみえない取り組み」をみると、

表3-4 生徒の学習能力や情報処理能力に関して

	就職率上位の高校			就職率中位の高校			就職率下位の高校		
	1位	1+2位	無し	1位	1+2位	無し	1位	1+2位	無し
1. パソコンの基本的なソフトを、授業等の学習や活動で積極的に活用できること	24.0	50.0	2.7	36.8	63.2	1.2	33.8	55.7	4.6
2. 調べたこと・観察したこと、意見や感想等を、説明できるプレゼンの技能・能力を育てる	25.3	50.6	19.3	30.4	57.2	15.7	31.1	54.9	15.2
3. 教科書で提示される基礎的・基本的な知識を確実に習得させること	38.0	52.0	4.0	23.6	36.4	8.0	23.2	37.1	8.6
4. パソコンやタブレットを用い、授業や学習に役立つ情報検索の力を育てること	5.3	13.3	6.7	4.4	12.0	6.0	2.6	13.2	4.0
5. 授業等で司会の仕方や意見のまとめ方等、コミュニケーションの技術や能力を育てる	2.0	4.7	16.0	1.6	8.4	16.1	3.3	16.5	13.9
6. 読解力や理解力、数的思考力や分析力等テスト・試験で求められる学力を伸ばすこと	2.7	16.0	19.3	1.2	13.2	23.3	1.3	7.9	16.6
7. 国際化等に対応し、外国人講師を活用し、英語のコミュニケーション能力を高めること	0.7	6.0	20.7	0.4	3.6	17.3	2.0	8.0	13.2
8. デイバート法などを取り入れ、自分の考えや意見を主張していく力を育てること	0.0	0.7	8.7	0.0	0.4	10.8	0.7	2.0	16.6
9. その他	2.0	6.7	2.7	1.6	5.6	1.6	2.0	4.6	7.3

就職率別に差異が少なく、上位校、中位校、下位校ともに選択率が高いのは「3. 学習障害等、特別支援教育を必要とする生徒に手厚い支援教育をすること」及び「6. 授業等で消極的な態度をとる学習意欲の低い生徒への支援」である。学習意欲の低い生徒への支援とか、特別支援教育を必要とする生徒への支援・教育は今日的な課題と位置づけられている。

表3-6は、生活の送り方や生き方の指導に関して、どのような取り組みをしているか。9つの取り組みを設定し、順位を付けて回答を求めた。表示は表3-1と同様。

1位選択で最も選択率が高いのは「1. 地域に出かけて就業体験やボランティア活動等を行い、将来地域で役立つ職業人としての生き方とか、地域に貢献する生き方を学ぶ指導」である。2位までの選択率は上位校、中位校、下位校ともに50%を超えている。続いて、選択率が高いのが「2. 部活動への参加を促し、集団活動を通して、忍耐力、自主性、判断力、リーダーシップ、協力や連帯感等を育成する指導」である。2位までの選択率は上位校、中位校、下位校ともに40%を超えている。

なお、「まだまだ成果がみえない取り組み」をみると、就職率別にみて少し違いがみられる。上位校では「6. 自分が学んでいる高校に誇りや愛着を持たせる指導、高校への所属感を育てる指導」(23.3%)及び「8. 学級(クラス)で他の生徒との人間関係をうまくつukれない生徒への指導」(17.3%)。中位校では「8. 学級(クラ

ス)で他の生徒との人間関係をうまくつukれない生徒への指導」(19.0%)及び「2. 部活動への参加を促し、集団活動を通して、忍耐力、自主性、判断力、リーダーシップ、協力や連帯感等を育成する指導」(15.3%)。下位校では「7. 高校生活には満足しているが、卒業後の進路を自ら考えようとせず、進路をなかなか決められない生徒への指導」(18.5%)及び「8. 学級(クラス)で他の生徒との人間関係をうまくつukれない生徒への指導」(14.6%)。学級での人間関係の形成が困難な生徒への支援が課題と位置づけられている。

4. 専門学科教員に求められる資質能力

高校の教育成果の産出に貢献することを職務とする高校教師には、どのような資質能力が必要とされるのか。次に、専門学科高校の教師に求められる資質能力の問題を考えていくことにする。

表4では、専門学科担当教員に求められる資質能力として大切なものは何かについて尋ねた結果である。調査では、高校教師の資質能力として重要だと思われる14の資質能力を設定し、その中から重要だと考える順に順位を付けて第3位まで回答を求めた。なお、選択肢の中で第1位で選択された比率の高い順に表示している。

14の選択肢の中で最も選択率が高いのは「1. 授業での教える技術(授業技術、教科指導力)が優れている」である。上位校、中位校、下位校ともに、第1位での選

表3-5 学習や生活の支援や指導に関して

	就職率上位の高校			就職率中位の高校			就職率下位の高校		
	1位	1+2位	無し	1位	1+2位	無し	1位	1+2位	無し
1. 不登校ぎみの生徒に、個別懇談や家庭訪問など、きめ細かな支援をすること	26.0	40.0	9.3	26.8	41.2	10.5	25.2	38.4	9.9
2. 校則や時間が守れないなど、規範意識が乏しく生活態度の良くない生徒への指導	22.0	35.3	3.3	17.2	30.8	2.0	18.5	31.1	1.3
3. 学習障害等、特別な支援教育を必要とする生徒に手厚い支援教育をすること	12.7	26.7	24.7	15.2	28.4	23.8	12.6	23.2	20.5
4. 生徒間の人間関係の深刻なもつれや軋轢、例えば、いじめ問題への対応や対策	16.7	38.0	6.0	14.0	32.4	4.8	9.9	25.8	10.6
5. 授業の進度に遅れ気味で、学力の点で問題が多い生徒への支援や指導	9.3	22.0	7.3	9.2	21.6	12.9	9.3	26.5	7.3
6. 授業等で消極的な態度をとる学習意欲の低い生徒への支援	6.0	16.0	18.7	6.8	18.0	18.5	14.6	26.5	20.5
7. 中途退学に至る傾向がみられる生徒に個別懇談や個別的に学習の支援を行うこと	4.0	13.3	12.0	6.8	17.6	10.1	4.6	13.9	7.3
8. 教師や学校に反抗的な態度をとる生徒への対応	1.3	2.0	2.7	0.8	1.6	1.2	1.3	3.9	0.7
9. 経済的に貧しい家庭のためアルバイト等で欠席が多く成績が悪い生徒の支援や指導	0.0	1.3	6.7	1.2	3.6	10.5	0.7	2.7	11.9
10. その他	2.0	0.0	9.3	2.0	4.8	5.6	3.3	7.9	9.9

表 3-6 生活の送り方や生き方の指導に関して

	就職率上位の高校			就職率中位の高校			就職率下位の高校		
	1位	1+2位	無し	1位	1+2位	無し	1位	1+2位	無し
1. 地域で就業体験やボランティア体験を行い、将来、地域に役立つ職業人とか貢献する生き方の指導	32.0	58.7	6.0	32.4	50.8	9.3	25.2	50.4	13.2
2. 部活動への参加を促し、集団活動を通して忍耐力、自主性、判断力、協力や連帯感を育てる指導	32.7	44.7	7.3	24.0	42.4	15.3	28.5	43.7	11.3
3. 場に応じた適切な挨拶ができないとか、ふさわしい言葉遣いできない生徒への指導	12.7	25.4	6.7	10.4	21.2	8.1	10.6	19.2	9.3
4. 高校生としての生き方、職業人としての生き方を考える授業を設け、その実践への動機づける指導	6.7	13.4	6.7	10.4	17.2	8.9	7.9	13.9	10.6
5. 遅刻をなくし、決められた時間通りの行動のできる、時間を遵守させ、時間を大切にす指導	4.0	19.3	7.3	8.4	25.6	2.8	10.6	23.8	3.3
6. 自分の高校に誇りや愛着を持たせる指導、高校への所属感を育てる指導	4.7	14.7	23.3	5.6	20.0	10.9	9.9	27.1	6.6
7. 高校生活には満足しているが、卒業後の進路を考えず、進路を決められない生徒への指導	5.3	13.3	14.0	5.2	12.8	12.5	2.6	7.9	18.5
8. 学級で他の生徒との人間関係がうまくつけない生徒への指導	0.7	5.4	17.3	1.6	3.6	19.0	2.6	5.9	14.6
9. 授業や学校行事等を通して、体力の向上や健康の増進を図り、生涯スポーツに取り組み楽しめる指導	1.3	4.0	6.0	2.0	4.4	8.1	0.7	5.3	7.3
10. その他	0.0	1.3	5.4	0.0	2.0	5.2	1.3	2.6	5.3

択率は30%を超えており、3位までの選択率の合計では60%を超えている。つまり、専門学科高校の教師に求められる資質能力として、最も重要だと考えられているのが授業での教える技術である。次いで選択率が高いのが「2. 普通科目であれ専門科目であれ、教える教科・科目に関する知識が豊富である」である。上位校（1位選択20.7%、3位までの選択32.0%）と中位校（1位選択19.2%、3位までの選択30.8%）に比して、下位校の選択率（1位選択25.8%、3位までの選択40.3%）が少し高い傾向はみられる。このことからわかることは、教える技術と教科・科目に関する専門的知識への選択率の高さは、専門学科高校教師にとって中核的な資質能力であると捉えていることである。

では、この教える技術と教科・科目に関する専門的知識以外では、どのような資質能力が専門学科高校の教師には求められるのか。次いで選択率が高いのは「3. 授業で生徒の発言をうまく引き出す、発表させる、書かせる、読ませる、議論させる等、授業への参加意欲を高めることに優れている」である。この生徒の主體的な学習を促す能力は、従来の教師主導の教授中心の授業（典型的には一斉授業）を批判的に変革し、改善をめざす際に不可欠となる授業における教師の力量である。中位校で選択率（1位選択19.2%、3位までの選択50.8%）が高い。続いて「4. 授業外の場面でも生徒とコミュニケーションがとれ、人間関係を築き維持できる」である。

この生徒との関係性の構築にかかわる能力は、教師が行う授業、学級経営、生徒指導など、生徒のかかわりを抜きにした指導が成立しないことを考えると、必要な力量である。そして、第3位までの選択率の合計でみると、第1位の「1. 授業での教える技術（授業技術、教科指導力）が優れている」に次ぐ高い選択率である。すなわち、上位校で56.7%、中位校で48.4%、下位校で53.7%。

逆に、選択率の低い資質能力をみると、最も選択率が低い資質能力としては、大学進学に関するものである。すなわち「12. 進学希望の大学等の学部・学科に関して学べる内容や取得できる資格を説明できる」「13. 指定校、AO入試等、大学等の推薦入試の情報を収集し、その対策に精通している」及び「14. 指導教科に関する大学等の入試問題に精通し、進学指導・対策に熱心である」はさわめて選択率が低い。続いて「9. 生徒が望む職業の内容を説明できる等、職業に関して幅広い知識や情報を取得している」と「11. 就業体験やボランティア活動の指導に、情熱をもって取り組むことができる」といった職業にかかわるガイダンスや就業体験やボランティア活動の指導に関するものである。この大学等への進学と職業の理解や選択にかかわる資質能力は、選択率をみる限り専門学科教員に求められる重要な資質能力とは位置づけられていないことがわかる。

また「6. 反抗的な態度をとる等の問題を抱える生徒に適切に対応できる生活指導の力がある」とか「10. 不

表4 専門学科高校の教員に求められる指導力（資質能力）

	就職率上位の高校			就職率中位の高校			就職率下位の高校		
	1位	2位	3位計	1位	2位	3位計	1位	2位	3位計
1. 授業での教える技術（授業技術、教科指導力）が優れている	30.7	20.7	60.1	32.8	18.8	60.8	37.1	22.5	65.6
2. 普通教科であれ専門教科であれ、教える教科・科目に関する知識が豊富である	20.7	6.0	32.0	19.2	6.0	30.8	25.8	9.9	40.3
3. 授業で生徒の発言を引き出す、発表させる、書かせる、読ませる、議論させる等、授業への参加意欲を高めることに優れている	16.7	12.7	38.7	19.2	19.2	50.8	14.6	15.9	44.4
4. 授業外の場面でも生徒とコミュニケーションがとれ、人間関係を築き維持できる	15.3	18.7	56.7	15.6	21.6	48.4	13.9	21.9	53.7
5. 生徒個々の学力の水準をよく理解できて、学力差に対応した教科指導力がある	4.7	8.0	23.4	4.0	7.6	21.6	2.0	7.9	19.2
6. 反抗的態度をとる等の問題を抱える生徒に適切に対応できる生活指導の力がある	6.0	12.7	28.7	3.6	9.2	19.6	0.0	6.0	13.3
7. 部活動等の対外的な試合やコンクールで優秀な成績を上げる指導ができる	2.0	4.7	19.4	2.0	3.6	22.4	2.6	2.6	13.8
8. 授業の進度に遅れがちとか、学習不振な生徒に気を配り、学習への個別支援ができる	2.7	3.3	11.3	0.8	6.4	10.4	0.7	4.0	10.0
9. 生徒が望む職業の内容を説明できる等、職業に関して幅広い知識や情報を習得している	0.7	7.3	12.7	0.4	2.4	6.8	0.7	4.6	10.6
10. 不登校や欠席がちな生徒の指導を、面談や個別指導を通して丁寧に行うことができる	0.0	2.7	6.7	0.8	2.0	10.8	0.7	2.5	5.2
11. 就業体験やボランティア活動の指導に、情熱をもって取り組むことができる	0.0	2.7	4.7	0.8	1.6	8.0	0.0	2.0	7.3
12. 進学希望の大学等の学部・学科に関して学べる内容や取得できる資格を説明できる	0.7	0.7	2.1	0.0	0.4	1.2	0.0	0.7	2.7
13. 指定校、AO入試等、大学等の推薦入試の情報を収集し、その対策に精通している	0.0	0.0	2.0	0.0	0.4	4.8	0.7	0.0	10.6
14. 指導教科に関する大学等の入試問題に精通し、進学指導・対策に熱心である	0.0	0.0	0.7	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	1.3
15. その他	0.0	0.0	1.3	0.4	0.4	1.6	1.3	0.0	1.3

登校や欠席がちな生徒の指導を、面談や個別指導を通して丁寧に行う」といった生徒指導や生活の指導にかかわる資質能力に関しても選択率は高くない。

おわりに

本稿では、まず専門学科高校の教育課程を取り上げ、普通教科・科目の履修の状況、及び専門教育の充実度という点からの卒業単位数に占める専門科目の単位数の位置づけをみた。また、専門学科での教育を特徴づけている資格取得の位置づけをみた。職業選択（就職）における実効的な効用という点での評価よりも、専門学科における授業や学習への意欲づけ、動機づけという点で評価されている。

次に、高校の教育成果を測る指標として、1) 生徒の

学力の向上、2) キャリア教育やキャリア開発、3) 大学等への進学、4) 生徒の学習能力や情報処理能力、5) 学習や生活の支援や指導、6) 生活の送り方や生き方の指導、の6つの指標を設定し、この6つの指標を基に専門学科高校の教育成果を数量的に明らかにした。特に就職率の数値を基に専門学科高校を分類し、教育成果に関する特徴を捉えようとした。

まず表2-11から表2-62に関して、教育成果を概観すると、2) キャリア教育やキャリア開発、4) 生徒の学習能力や情報処理能力、5) 学習や生活の支援や指導、6) 生活の送り方や生き方の指導、で成果を認める高校が半数以上を占める傾向にある。他方、1) 生徒の学力の向上、3) 大学等への進学、では成果を認める数値は少し低い。

第2に、表3-1から表3-6の6つの表から教育成果

に関連した取り組みをみた。

表3-1では、生徒の学力の取り組みとして、第1位選択では「1. 習熟度別編成を行い、生徒の学力や成績に対応した指導」という取り組みが、2位までの合計では「2. 個別指導の充実（個別指導時間の設定等）や補習授業の導入」という取り組みが、最も選択されている。なお、就職率別にみると、上位校では、習熟度別編成での授業や個別指導の充実や補習授業の導入、学力の低い生徒への指導の工夫などを、下位校では、習熟度別編成での授業、個別指導の充実や補習授業の導入に加えて、新しい授業方法としての協同学習の導入等の取り組みでの成果を認識している。就職率上位校での学力の向上に関する取り組みの困難さの一端がみられる。

表3-2では、キャリア教育やキャリア開発の取り組みとして、就職率上位校と中位校では「1. インターンシップや就業体験の機会を設けて、就業の体験活動を行うこと」及び「2. 職業にかかわる各種の資格取得を、生徒に奨励し、資格取得生徒の人数を増やすこと」への選択率が特に高い。他方、下位校では「4. 卒業生や著名な職業人を招き仕事への取り組み方を話してもらう機会を設けること」と「3. 将来の進路を考える機会を増やし、進路実現に向けて意欲的な態度を育てていく」といった取り組みへの選択も少し増えるという特徴もある。

表3-3では、大学等への進学取り組みをみた。1位選択で最も選択率が高いのは「1. 専門学科で学んだことを活かし、推薦入試・AO入試等での合格者を増加させること」である。就職率の下位校で、この取り組みの成果が高く評価されている。続いて「2. 大学で学ぶことの意義や知的な探究の楽しさ・喜びを教えること」が評価されている。

表3-4では、生徒の学習能力や情報処理能力の取り組みとして、就職率の違いとの関連性が少しみられた。「1. パソコンの基本的なソフトであるワード、エクセル、パワーポイントなどを、授業等の学習や活動で積極的に活用できること」が中位校、下位校で最も実施されている取り組みである。他方、上位校では「3. 教科書で提示される基礎的・基本的な知識を確実に習得させること」が最も実施されている取り組みである。

表3-5では、学習や生活の支援や指導の取り組みとして「1. 不登校ぎみの生徒に、個別懇談や家庭訪問など、きめ細かな支援をすること」がどの高校でも最も実施されている。続いて「2. 校則を守れないとか、生活態度の良くない生徒への指導」が取り組まれている。なお、就職率別に特徴を探ると、上位校と中位校では「4. 生徒間の人間関係の深刻なもつれや軋轢、例えば、いじめ問題への対応や対策」と「3. 学習障害等、特別支援教育を必要とする生徒に手厚い支援教育をすること」。

下位校では「6. 授業等で消極的な態度をとる学習意欲の低い生徒への支援」と「5. 授業の進度に遅れ気味で、学力の点で問題が多い生徒への支援や指導」である。

表3-6は、生活の送り方や生き方の指導の取り組みとして「1. 地域に出かけて就業体験やボランティア活動等を行い、将来地域で役立つ職業人としての生き方とか、地域に貢献する生き方を学ぶ指導」への取り組みが最も実施されている。続いて「2. 部活動への参加を促し、集団活動を通して、忍耐力、自主性、判断力、リーダーシップ、協力や連帯感等を育成する指導」への取り組みである。

第3に、こうした教育成果の産出において主要な役割を担っている専門学科担当教員には、どのような指導力（資質能力）が求められるかを検討した。表4に示したが、専門学科担当教師に最も求められる資質能力とは「1. 授業での教える技術（授業技術、教科指導力）が優れている」である。上位校、中位校、下位校ともに、第1位での選択率は30%を超える。次いで「2. 普通科目であれ専門科目であれ、教える教科・科目に関する知識が豊富である」である。つまり、教える技術と教科・科目に関する専門的知識への選択率の高さは、専門学科高校教師にとって中核的な資質能力であると捉えているのであろうか。この教科・科目の知識とその指導力以外の資質能力は総じて選択されていない。つまり、教科・科目の教科書を用いない指導力量への眼差しは弱いといえる。生徒指導をはじめ、職業理解や選択にかかわる指導、大学等の進学にかかわる指導力等はあまり評価されていないのである。

ところで、今回の調査では、ポーマン等が提示している、学力形成（Academic Achievement）、キャリア開発（Career Development）、大学への進学（College Preparation）、情報処理能力（Digital Literacy）、中途退学（Dropouts）の5つの指標に、生活の送り方や生き方の指導という指標を加えて、わが国の高校の主要な教育成果を捉えようと試みた。この6つの指標が全面的に妥当するかどうかという問題を、今後、検討していく必要がある。

注）

- 1) 文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領 総則編』東山書房
- 2) Borman, K. M., Cahill, S. E., and Cotner, B. A., (2007). The Praeger Handbook of American High Schools, Vol. 1. Praeger Publishers.
- 3) 拙論「高校教育の成果と教師の資質能力－普通科高校の校長調査から－」関西学院大学人文学会編（2016）『人文論究』第65巻第4号、87～110頁、を参考に今回の専門学科の調査では指標を1つ加えた。
- 4) 就職率上位校とは卒業生のうち66.7%以上が就職、就職率中位校とは卒業生のうち40.0%～66.6%が就職、就職

率下位校とは卒業生のうち就職の比率が40.0%未満。

なお、本調査は平成27年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）（研究課題番号、25381153）により実施した。

（みなみもと おさお・関西学院大学教授）